

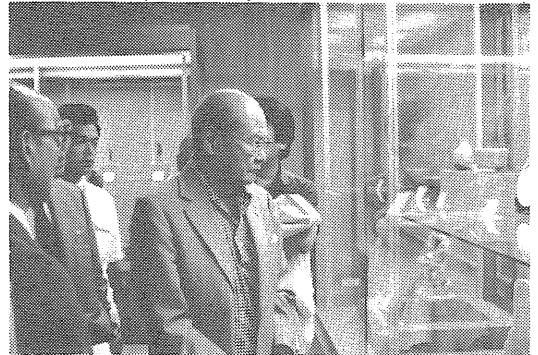
対馬・唐津等をめぐって

日韓トンネル研究会名誉会長 松下 正寿
元立教大学総長

第1部会の現地視察団は近畿大学々長景山哲夫先生、早稲田大学教授島羽欽一郎先生、政治経済評論家の李健先生、一橋大学教授の中川学先生と私、松下正寿の5名、それに事務局3人が参加し、合計8人から構成され、7月13日(水)午前9時羽田空港に集合、9時55分東京を発ち福岡を経て同13時対馬空港に到着、上見坂、小茂田、椎根を経て厳原に到着、同町の対馬交通ホテルで1泊した。翌14日には早朝万松院から郷土資料館を視察し、館長から懇切な説明を聞いた。それから万関橋、梅林寺を経て韓国連山展望台に登った。晴天の時はここから韓国が展望できるとのことであるが、曇っていたので韓国は見えなかった。その夜は対馬比田勝の上対馬荘で泊る。翌15日(金)には比田勝からオメガ鉄塔を経て対馬空港着、これで大体対馬を一周したわけである。対馬から福岡まで空路わずか30分。名護屋城跡を見学し、事業団唐津事務所を訪問、その夜は唐津シーサイドホテルで1泊、翌16日は朝から自動車でも唐津から福岡まで、博多全日空ホテルで1泊、その日、日韓トンネル研究会九州支部設立総会が開催されたので一行はそれに参加。翌17日福岡空港を発ち羽田に着。旅程はそれだけであるが、感想は無限である。とは言うものの無限に語られては読者の迷惑この上無しであるから2、3の点に止めておこう。第1に驚いたのは対馬が大きいということであった。そんな「驚き」は一に私の地理観念の不足にあることは確かであるから余り自慢にはならない。地図で見ると対馬は虫めがねでないとよく見えないほど小さい。だから私は対馬という島は小さい島であると思い込んでいた。ところが車で島を一周してみると実に大きい。私は対馬が韓国に一番近いところにあることを知っていた。従って私は対馬には韓国人が沢山いるし、風俗慣習全て韓国に近いのではないかと思っていた。然るに島を一周して対馬は内地とちっとも違ってない。私の好奇心には水をかけられたが「ここは確かに日本の領土だ」という安心感も得られた。と

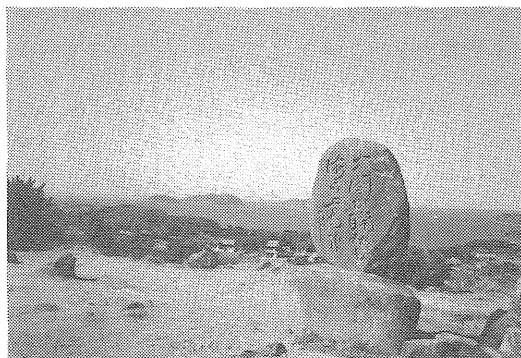
言うのは日韓親善を切望する私としては竹島問題は頭痛の種だからである。あの島の帰属問題をめぐって日本は国際司法裁判に提訴することを申し入れたが韓国は拒絶した。国内の裁判と異り、国際裁判には強制力がないから当事者の一方が応訴を拒否すれば裁判は行われない。私は竹島の帰属問題については研究不足であるから意見を言う資格が無い。それより対馬にはそんな問題がないのを日韓両国のために喜ぶだけである。

名護屋城跡に立って私は秀吉を偲んだ。ここは秀吉の文祿慶長の役、即ち朝鮮征服の根拠であった。晩年の秀吉はこの城から韓国に出兵した20万の軍隊の指揮をしたのである。秀吉は何故朝鮮に出兵したか。私はこの問題に関心を持ち、色々文献に当たったことがある。結局のところ何もわからなかった。ただ秀吉の書いたものとして伝えられている手紙のうちに「皇居を北京に移し奉り…」



対馬郷土資料館にて

という言葉がある。それが事実としたら彼の目的は朝鮮征服ではなく、明国を支配することであった、朝鮮はその道具に使われたのである。私にはどうしても明国征服が軍事的に成功するという計算が考えられない。失敗は初めから明らかであった。案の上、戦局益々不利になり、現地からは秀吉「御渡海」の要請があった。しかしその頃秀吉の健康は著しく衰え、坊間には「今日も御渡海(五斗買い)、明日も御渡海(五斗買い)」という皮肉が流行したと言われている。一説によると朝鮮征服には秀吉自身にしては余り熱心ではなかったが、石田光成が加藤清正、福島正則等武將の勢力を削ぐ目的で仕かけた陰謀であるとも言われている



名護屋城跡から峯岐を見る

る。事情はよくわからないが、秀吉が晩年老衰し、判断力を失ったことは事実であろう。我々のような凡人なら多少もうろくしてもひとから相手にされないだけのことでその影響は大したことではない。しかし秀吉ほどの英雄がもうろくするとその及ぼす影響甚だ甚大である。私は数回韓国を訪れているが文祿慶長の役の爪跡は非常に深く、韓国人は絶対にそれを忘れていない。私は本居宣長という人を非常に尊敬している。従来の日本の史家が日本書紀を中心とし、殆んど古事記を無視していたのに宣長は古事記の超重要性に着目し、30年の年月をかけて「古事記伝」を書いたのは日本の歴史の見方を一変した。本居宣長の名は日本の歴史の続く限り忘れられないであろう。然るに誠に残念なことには彼の「ぼつかいがいげん駁戒概言」という本の下の巻下の前半に秀吉の征韓の経緯を評述し、秀吉を非常に賞揚している。私は他の点について本居宣長を尊敬しているのであるが、さればこそ一層彼の征韓に対する態度を悲しく思うのである。しかし文祿慶長の役は既成事実として歴史にくり入れられている。我々はそれを抹殺することはできない。我々としてできることは文祿慶長の役に発揮された破壊のエネルギーを日韓親善促進という建設へのエネルギーに転換することである。そして私は日韓トンネルの建設こそ正に我々に課せられた罪の贖いであると思う。

空想から科学へ

近畿大学学長 景山 哲夫

「空想から科学へ」という言葉がある。何年前までは「空想」の分野と「科学」の分野とが正確に一科学的に一識別できた。だが、今日のように、科学技術が急速に発達すると、どこまでが空想で、どこからが科学であるのか、区別することが難かしくなってきた。人間の能力が次第に神の能力に迫ってきた。人間は古くから、鳥のように自由に空を飛び回りたくて空想していた。人間は今、空想ではなく、地球の空どころか、宇宙を駆け巡っている。無重力の天体で食事をとり、排泄を行っているのだが、無重力の天体では排泄物はどこに溜るのだろうか。大変な空想を必要とする。第一、無重力の世界では「溜る」という言葉は不適當だろう。

最近、さかんに人造臓器が開発されている。人間の肉体、内臓・骨格を造るのは神の行為であった。人間は神の領域を犯し始めている。それどころではない。今日では遺伝子工学、バイオテクノロジーの発達によって、神さまも行ったことのない遺伝子の組み換えを始めている。生命現象の本体、DNAの解明と利用を目的としている。

人間が存在する限り、その知識、科学技術の発展は無限である。問題が提起されれば、その解決は時間の問題に過ぎないと、今日の人間は信じている。ところで今日、全世界の人達が解決を待望している最大の問題は何か。いうまでもなく、それは世界平和の実現と核戦争の回避である。

今年もまた、八月が近くなった。核兵器廃絶を目ざす原水爆禁止大会が、広島、長崎などで大集会が決行されるであろう。反核、反戦の世界的草の根運動は大挙してアメリカまでも出かけるのかも知れない。この運動は当然、モスクワに向っても進行すべきだろう。ソ連は世界最大の核兵器保有国だからである。ソ連も核兵器が地球をふっ潰ばす恐るべき兵器であることを熟知している。「だから」—というのは理解し難いが—ソ連はヨーロッパにSS20を仕掛けており、それに対抗してアメリカはNATOに巡航ミサイル、パーシング